藤田東湖

幕末志士に慕われた水戸藩の英傑　水戸市

（幕末と明治の博物館蔵）

文化３年 (1806) －安政２年 (1855)。水戸城下〔水戸市梅香〕に水戸藩士で学者でもあった藤田幽谷の二男として生まれる。本名は彪。水戸藩第９代藩主徳川斉昭に重用されてその改革政治を助ける。戸田忠敞・武田耕雲斎と並び，「水戸の三田」と称される。弘道館の建学精神を記した『弘道館記』の下書きを書くなど水戸藩内で重要な役割を担う。また，『弘道館記』の解説書である『弘道館記述義』のほか，『回天詩史』，『常陸帯』など，多くの著作があり，東湖の思想は幕末の志士たちに大きな影響を与える。安政２年 (1855)，江戸を突然襲った安政の大地震で，藩邸にいた母を助けようとして，犠牲となる。

藤田東湖は，水戸藩の学者・藤田幽谷の二男として，水戸城下の上梅香〔水戸市梅香〕に生まれました。父は自宅に青藍舎という塾を開いていたので，東湖も幼いころから学問に興味をもちながら成長しました。

14 歳の時，父に従って初めて江戸の地を踏むと，武道にもめざめ，神道無念流の岡田十松に入門しました。このころ，水戸藩の沖合いにはしばしば外国船が姿を見せるようになっていました。

（今の日本は外国に対しての備えもなく，武士の士気も低い。こんな時に外国から攻められでもしたらどうなるのか。これからは外国にも備え，国を守らなければ。）

東湖がこのように考えている時に，恐れていたことが起きたのです。文政７年 (1824)，イギリスの捕鯨船員 12 人が水戸藩領の大津浜〔北茨城市〕に上陸したのです。東湖は，日ごろの武術鍛錬の成果をみせるべしという父の命により，現地に急行し，彼らを斬って自分も死のうと決意します。しかし，東湖が現地に行く前に捕鯨船が沖合いに去ってしまったという知らせが入ってきたので，志を果たすことはできませんでした。東湖 19 歳の時のことです。

20 歳を過ぎたころから，東湖は今まで武道に偏っていた自分の生き方を反省し，（文武というものは両方大切だ。武道だけをしていて，学問をおろそかにしていては，武道も役に立たなくなってしまう。）と考え，学問にも身を入れるようになります。

やがて東湖は，水戸藩第９代藩主となった徳川斉昭（P.43 参照）の政治を支え，軍備の拡充や藩校弘道館の建設などに取り組みます。

ところが，弘化元年 (1844)，斉昭が突然幕府から改革政治の行き過ぎを咎められ，藩主辞任と謹慎の罪を受けてしまいます。東湖もこの時，役職を奪

『弘道館記述義』（茨城県立歴史館蔵）

われ蟄居<外出が禁じられる刑>となってしまいました。東湖 39 歳の時でした。
(こうなってはどうしようもない。自分も自由に外に出ることもできないので，これからは，日本の国のあり方を思い，外国に左右されない国づくりはどうしたらよいか考えて，それを書物に書き残しておこう。)

そのころ書かれたのが『回天詩史』，『常陸帯』，『弘道館記述義』といった著作です。斉昭の罪が許され，東湖がようやく自由の身になるのは 8 年後，47 歳の嘉永 5 年 (1852) でした。

翌 6 年 (1853) にはペリーが来航し，日本中が大騒ぎになる中，東湖は斉昭を助けて海防問題の処理に追われる日々が続きました。安政元年 (1854) からは側用人の要職につき，多忙な日々を送っていました。東湖のもとには，全国から多くの学者や志士たちがその教えを受けに訪れました。薩摩〔鹿児島県〕藩士の西郷隆盛も，東湖の教えを受けた一人です。

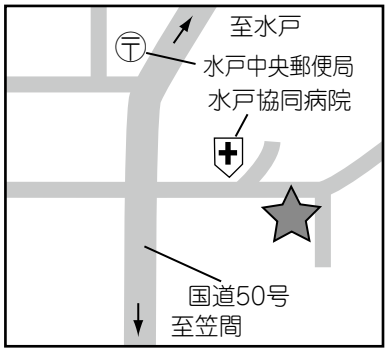
安政 2 年 (1855)10 月 2 日，突然，江戸中をひっくり返すような大地震が発生しました。江戸の水戸藩の屋敷〔東京ドームのあたり〕にいた東湖も家族とともにいったん家の外に逃げ出しました。しかし，「大切な品を持ち出すのを忘れた。」と母はまた座敷へ戻っていったので，東湖も驚いて家へ飛び込み，母を抱きかかえ表へ出ようとしたその瞬間，太いはりが東湖の頭上にくずれ落ちました。東湖が両手で母を押しやったので，母は無事でしたが，東湖自身は犠牲となりました。50 歳でした。

ゆかりのスポットに行ってみよう

藤田東湖生誕の地

所在地　水戸市梅香１－２－２０

内　容　藤田家の屋敷があった場所で，井戸の跡が残され，藤田東湖の銅像が建っています。



おもな参考文献

『藤田東湖』（鈴木暎一・吉川弘文館・１９９８）
『水戸の先達』（水戸市教育委員会・２０００）